

研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成30（2018）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 九州大学（教授・安達 千波矢）

研究交流課題名 熱活性化遅延蛍光材料の発光機構解明と新規発光材料への挑戦

評価結果（総合的評価）

- | | |
|----------------------------------|--|
| <input type="radio"/> | A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| <input checked="" type="radio"/> | B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| <input type="radio"/> | C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| <input type="radio"/> | D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題は、熱活性化遅延蛍光材料という、研究テーマが明確であるため、材料とデバイス・測定、また化学と物理の異分野のエキスパートが交流できるように有効に設計されていて、それぞれの研究機関が得意とするアプローチで系統的に明らかにするための研究ネットワークがすでに構築されている。現時点で複数の研究成果を挙げており、基礎研究だけではなく応用を見据えたデバイスの創製を実現し、波及効果も高い。連携5ヶ国の各拠点で、ワークショップやシンポジウムを活発に開催し、共同研究の意見交換、若手育成を積極的に推進している。特に、研究交流課題になっている熱活性化遅延蛍光（TADF）の科学技術に関する最も大きな国際会議を、代表者が九州大学で毎年開催していることは、拠点形成に大きく寄与すると考えられる。

若手研究者の育成に向け、若手を中心とした人的交流やセミナーの開催など盛んに行われている。九州大学と英国セント・アンドリュース大学が中心となり、大学院生・ポスドクが参画のもと研究交流会等を開催しており、今後の成果および人材育成効果が期待できる。

国際共著論文としては、拠点の規模を考慮すると十分に多いとまでは言えないものの、オーストラリアグループとの共著として3報、英国グループとの共著として2報が発表されており、当該分野で国際的な評価が高い論文誌にも共著で着実に出版している。また、それらの幾つかはすでに多くの論文に引用されてきている。

コロナ禍の影響で人の移動ができなくなってもZOOMやTeamsを使ってセミナーやディスカッションが行われており、サンプルを交換して日本で赤外時間分解分光を行うなど予期しない事態が生じても臨機応変に対応している。新たな共同研究費の獲得や、新たなシーズの発見、共同研究先の広がりも見せており、研究拠点としての形成が順調に進んでいると考えられ、当初の目標の達成が期待できると考えられる。